

# 先生 清風 村田 賢先



## 私の意見

三隅町社会福祉協議会

池信大融

「袖ふれあうも多生の縁」と申します。世の中に「あかの他人」という人間は居ない筈であります。同じ地域社会に住む人達が、お互いに、喜びも、悲しみも、頌ちあうところに、本当の福祉社会の実現があります。

近年、わが国の社会福祉諸制度は、急激に、充実発展してまいりました。そのこと自体は、近代国

家として当然のことであり、嬉しいことではありますが、ともすると、福祉といえば、国や自治体が行政で、施設を造ったり、金や物を配ったりすることで、国民は、たゞ、享受するだけであるように誤解している向きもありません。行政施策も大切であります。行政に、自分達の社会は、自分達で守ろうという、社会連帯

の気持がなくては、本当の社会福祉は成就しないのではありますまいか。

近頃、社会福祉サービスのあり方が、施設収容保護から在宅援助に移りしつ、あるように云われております。不遇老人、心身障害者児童の在宅援護は、近隣住民のあたたかい愛情と連帯感が無くては、出来ることではありません。本町でも、こうした社会連帯感に目覚めて、進んで、余力を社会奉仕に捧げたいという、ボランティアの方々、だんだん、増え

## 天保改革の背景

①

徳川時代二百数十年間において天保期の毛利藩政改革は、まことに大きな画期をなしている。

十九世紀三十年代四十年代の天保改革は、およそ三十年程後の明治維新に直接つながっている、つまりこの改革は徳川時代の根底からくつがえす、勢力交代劇の舞台装置が用意され、一つの起爆剤ともなったのである。

元来徳川中期以後幕府の統制力が非常に弱まって、商品流通の増大に伴って大阪などの中央市場の大商人、特権商人の勢力がのび、それを幕府が支配力をもって押えている形であった。

所が近世後期になるとその経済構造の枠が崩れて、商品も一藩専売―大阪特権商人というコースから、直接の生産者―在郷商人とい

## 長門三隅駅の貨物の取扱廃止

長年にわたり利用されていた、貨物の取扱いがいよいよ三月三十一日から廃止されましたので、これからの営業範囲をお知らせします。

- 昭和五十二年四月一日
- 二 関係 駅 長門三隅駅
- 三 営業範囲の改正
- 現行 旅客、荷物、車扱貨物
- 改正 旅客、荷物
- (注) 荷物は一個の重さが三十
- 斤瓦まで、縦、横、高さの合計が二米までのものに限り取扱いされる。

つあることは、まことに、有難いこと、云わねばなりません。今後、この奉仕者の方々を中心

に、住民福祉の組織づくりが、地域ごとに進展するよう、ひたすら念願するところであります。

ウルートにかわり、それをもう一度上から統制しようとする権力側の動きに対し、藩専売反対を唱える百姓一揆等となり、激しい抵抗をうける様になってきた。

この様な事態は藩として特権商人をつかんでおけば経済は安定してゆけるという目安がなくなり、単に節儉や物づくりの殖産興業ではだめになって来た。そこで次に来るだろう新しい社会体制を見通した施策をみだすか、又は今迄のやり方を根本的に変革しなければならぬことになって来た。

一方幕府時代に外様と見なされることがに敵視された毛利藩は、お国意識が強く、幕府に対して背反しようとする意欲がうっぼつと湧いていた。

藩は天保元年(一八三〇)と翌

二年に大百姓一揆が起り参加者も十万以上に数えられ、更に天保三年、天保八年にも一揆が起っている。その要求する所の最大ものは、藩営専売の廃止であった。

藩が藍や櫛(ハゼ)等の主要な物産を一手ににぎって買売していることへの恨みであった。

農民から強制的に安く買上げて、藩の手で高価に売捌くのみならず、商品生産と流通が発達して来た時期だけに、農民の自由化への要求が沸騰したのである。

毛利藩の天保改革は、この打続く一揆を契機として、内には「八万人の大敵」と呼んだ赤字藩財政約二百万両(藩年収の二二倍)への処理のため、村田清風(略敬称)が抜てきされ、その大任務に当ることになった。

この先賢村田清風について順を追って、述べ叱正をおおぎたい。町文化財専門委員長長音藤元宣